青少年期の音楽経験とその後

―「ブラバン(吹奏楽部)」と「けいおん(軽音楽部)」―

法政大学大学院兼任講師

学習院大学文学部教育学科助教

宮人 恭平 歌川 光一

青少年期の音楽経験

――60歳になってもオールマン・ブラザーズを聴かなければならない理由などない。だけど、たとえ何歳になっても聴き続けるのは青少年期に聴いていた音楽だ――

テンブル大学で発達心理学を研究しているローレンス・スタインバーグ教授は、青少年期に聴いた音楽がその後の人生に与える影響についてこう語っている (New York Times)。主観的とも思われるスタインバーグ教授の発言は、近年の神経科学の飛躍的な進歩によって論理的に説明されるようになった。人間の推論能力や衝動の抑制を司る脳の前頭前野は青少年期の直前に大きく活動し、アイデンティティを形成しようとする。したがって、青少年期に受ける文化的な刺激が大

きな印象を残すことになるのだ。

もしかしたら、青少年期に音楽とまったりかかわらない日々を過ごす人たちがいるかもしれない。しかし、多くの人たちは、能動的にせよ受動的にせよ、何らかの形――テレビやインターネットで音楽を視聴したり、カラオケで好きな曲を歌ったり、あるいは、友人とバンドを組んだり――で音楽と接する機会があるはずだ。たとえば、レジャー活動への参加実態をみると、性別によって多少の差はあるものの、青少年期に当たる10代の音楽に関連する活動への参加率は高いことが分かる (次頁表上)。

とくに、青少年期に音楽と密接に関与する機会が与えられる環境のひとつには、学校教育での課外活動があげられるだろう。そして、その代表とも呼べるのが吹奏楽部だ。

吹奏楽部の人気

2014年2月12日、福岡市の精華女子高等学校吹奏楽部は、J-POPのレーベル(SME)から『熱血!ブラバン少女』というタイトルでCDデビューを果たした。さらに同月17日には、オリコン週間アルバムランキング(24日付)のクラシック部門で初登場1位、総合部門でも25位を獲得した。精華女子高等学校は、全日本吹奏楽コンクールで金賞を9回受賞しており、テレビ番組『笑ってコラえて!』(日本テレビ)の人気コーナー「吹奏楽の旅」でも取り上げられている。同校のウェブページでは、人気と実力を兼ね備えた吹奏楽部の活躍が紹介されている (http://www.seika-ghs.ed.jp/c_band.html)。

精華女子高等学校が金賞を受賞した全日本

	全体 (%)	男性全体 (%)	10代男性 (%)	女性全体 (%)	10代女性 (%)
コーラス	2.8	1.3	2.0	4.3	4.9
洋楽器の演奏	9.0	7.9	6.0	10.1	26.5
邦楽、民謡	2.4	2.0	4.0	2.7	6.9
音楽会、コンサート	25.2	18.4	17.0	31.8	37.3
音楽鑑賞	39.3	38.6	45.0	39.9	58.8
カラオケ	35.9	35.2	51.0	36.6	76.5

※回答総数=3,334 (男性=1,637、女性=1,697)

表1 性・年代別余暇活動参加率 (2012年) 出典:『レジャー白書2013』

	小学校	中学	高校	大学	職場	一般	合計
2010年	1,125	7,188	3,792	331	88	1,771	14,295
2011年	1,114	7,195	3,792	330	86	1,748	14,265
2012年	1,122	7,204	3,811	328	77	1,731	14,255

※2012年10月1日現在

表2 全日本吹奏楽連盟加盟団体数の推移 出典:『すいそうがく』

吹奏楽コンクールは、東京都杉並区の専門館でおこなわれていた。1972年から全日本吹奏楽コンクールのおもに中学と高校部門の舞台として使われていたこの会場は、所有する宗教学法人立正佼成会が同会館の耐震改修や建て直しを断念したために、2012年以降の使用ができなくなってしまった。専門館は吹奏楽に取り組む中学生や高校生にとっては「聖地」となっており、「吹奏楽の甲子園」とさえ呼ばれていた。残念ながら、彼女／彼ら

は吹奏楽の「聖地」を目指すことはできなくなってしまったが、それでも吹奏楽部の人気は衰えることがないようだ。たとえば、全日本吹奏楽連盟に加盟している団体数の推移をみると、加盟団体数の合計数は10年から12年のあいだに40団体が増加している。その一方で、中学校では16団体、高等学校では19団体が、それぞれ増加しているのだ。

物語としての「ブラバン」

今でこそ、精華女子高等学校のCDがオリコンで首位を獲得しているが、かつて吹奏楽のCDは「観賞用」というよりはむしろ、吹奏楽にかかわる人たちのための「資料」にすぎなかった。最近では、2013年7月31日に「あまちゃんぶらばん公式版吹奏楽『あまちゃん』曲集」(ビクター)や、14年3月26日には『ブラバンもいろいろクローバーZ〜BRASS AND ROMANCE〜』(キングレコード)などが発売され、いずれも好調な売り上げを見せている。こうした吹奏楽の人気は、2000年代以降のドラマや映画、そしてマンガといったポピュラー文化のメディアからも確認することができる。

吹奏楽部を扱ったドラマや映画には『×××××』(1999年、TBS)、『スウィングガールズ』(2004年、東宝)や『ラ

ブラバンバン』(2008年、トルネード・フィルム)などがある。また、マンガには柏木ハルコ『ブラブラバンバン』(1999)2000年、小学館)、米根真紀『小松山中学吹奏楽部』(2002年、ラポートコミックス)、田川ちよこ『ひかるファンファーレ』(2007)10年、芳文社)、都桜和『うらばん!』浦和泉高等学校吹奏楽部』(2007)11年、芳文社)宇佐悠一郎『放課後ウインド・オーケストラ』(2008)09年、集英社)、河原和音『青空エール』(2008年)、集英社)、鶴ゆみか『暴走系吹奏楽列伝ブラボー! Brass Boy』(2009年、講談社)、ミキマキ『ビビキノBB——男子校吹奏楽部ライフ』(2010年、秋田書店)や神海英雄『SOUL CATCHER(S)』(2013年、集英社)などがある。

吹奏楽部は「ブラバン」という呼称で親しまれているが、そこに含まれる音楽ジャンルは、クラシックからJ・POPまでさまざまだ。しかし、「ブラバン」が奏でる音楽は、あくまでも吹奏楽部用にアレンジされたものだ。つまり、「ブラバン」では「クラシック的な音楽」、あるいは「J・POP的な音楽」が演奏されており、その文脈においては「ブラバン」がひとつの音楽ジャンルとして認識されるのだ。そして、「ブラバン」と

いうジャンルでは「物語」が共有されている。人びとは「ブラバン」の「音楽」にはなく、「学校生活」「青春」「若者らしさ」といった「物語」に関心を寄せているのだ。そのような「物語」は、テレビや映画、あるいはマンガといったメディアによって再生産されているのだ。

「ブラバン」や「けいおん」

2000年代後半以降、軽音楽部の人気が高まっている。その要因のひとつには、マンガやテレビアニメ『けいおん!』の人气がある。もともと、『けいおん!』をきっかけに軽音楽部に入部する生徒は増えているようだが、彼女／彼らが部活動を辞めることなく続けるかどうかは疑問だという声もあがっている。また『けいおん!』の作品をコピーする軽音楽部の生徒は決して多数派ではないようだ。つまり、必ずしも『けいおん!』の人气が軽音楽部の人気を支えているわけではないとさそうだ。

最近の高校生がコピーするバンドは、ASIAN KUNG-FU GENERATION、チャットモンチーやONE OK ROCKといったJ-POPのバンドに加え、アニメソングやボーロイドなども含まれている。都内の高校で軽音楽部の顧問を務める男性教諭は、「軽音部

はアンプを通した吹奏楽部。ロックスピリットを教えようとは思っていない」と断言している。つまり、軽音楽部では「けいおん」というジャンルのもとで「物語」が共有されているのだ。そして、「ブラバン」というジャンルに「物語」がともなっているのと同様に、「けいおん」のイメージからも「物語」が見いだされるのだ。

高校での軽音楽部の人気を受けて、全国規模で「高等学校文化連盟軽音楽部門」の設置準備がおこなわれており、「高等学校軽音楽部連盟」を設置する地域が見られるようになってきている。そして、「バンド指導こそ、最高の教育実践の機会」（高等学校軽音楽部連盟大阪）や「部活動を通じての生徒の健全なる精神の育成」（埼玉県高等学校軽音楽連盟）といった軽音楽部の活動方針は、まるで「物語」からつくり出された「精神論」のように思えてしまう。

（以上、宮入恭平）

生徒からみた部活動

2012年に日本アカデミー賞最優秀作品賞を受賞した『桐島、部活やめるってよ』（原作・朝井リョウ、監督・吉田大八、脚本・喜安浩平／吉田大八）では、部活動と、部活動から抜け出した帰宅部、そして彼らを取り巻

く「スクールカースト」が描かれている。同作品は、部活に励む向学校文化的な生徒たち（映画部）に属する主人公を含む」と、部活に励みすぎずに、遊びや恋愛関係、塾といった反学校文化に浸る生徒たちの棲み分け、そして、大人たちに薄ら感じ取られている、生徒間の上下関係を詳らかにすることを基調にしている。しかし、作品の終盤には、後者の生徒が、前者の生徒の態度に密やかな「脱学校文化」の要素を見出し、「反学校」に勤しむことで学校にしがみついている自身の姿に空しさを覚えることになる。

日本の部活動は、音楽であれ、スポーツであれ、「みなで一丸となつて勝ち抜こう」という競争主義と、「頑張った過程に意味がある」という努力主義という、相対する側面のバランスに成り立っていると考えられてきた。しかし、「桐島」が描いているのは、「脱学校」、すなわち、「学校に用意されているイマの部活動が、自身の将来のキャリアにつながることも考えていないが、とりあえず没入していることにしよう」とする生徒目線の状態である。この視点に立った場合、重要になるのは、当人がアイデンティティを確保できるような（趣味の近い）仲間作りとしての部活動であり（野垣内・笹野2012など参照）、そのような仲間作りの「物語」を、その後

温めてゆくことである。この過程において、「熱血顧問」による「指導」「育成」は、二義的な存在となる。

部活動経験のその後

中・高時代の部活動経験を通じた「自己開示」や「友人獲得」は、その後の大学生活の「友人関係」にも良い影響をもたらすことが明らかにされている(斉藤2001)。特に高校時代の部活動経験は、大学時代のスキルアップに対する態度に影響を与えるとされている(長谷川2011)。

とは言え、青少年期の音楽活動は、先の「桐島」の例でも見たように、たとえその後音楽大学などに進学しても、直接的なキャリア形成につながると限らないのが現実と言えよう。しかし、だからこそ、青少年当人たちも、そのような将来を想像しながら、部活動などの場を利用して「仲間作り」の物語の共有を自己目的化させているのかもしれない。

(以上、歌川光一)

〈参考文献〉

- ・阿部勘一／細川周平／塚原康子／東谷護／高澤智昌『ブラスバンドの社会史——軍楽隊から歌伴へ』青弓社、2001年
- ・長谷川祐介「大学生活に対する志向性に及

ぼす中学校高校部活動の影響——教科外活動の長期的効果に関する分析可能性——『大分大学教育福祉科学部研究紀要』33(1)、97-108、2011年

・松永良平監修『音楽マンガガイドブック——音楽マンガを聴き尽くせ』ディスクユニオン、2014年

・宮入恭平、佐藤生実『ライブシーンよ、どこへいく——ライブカルチャーとポピュラー音楽』青弓社、2011年

・成松哲『Kids these days! いまふきの10代に聞いたリアルな「けいおん!」の話』vol.1、vol.2、2011年、12年

・野垣内菜穂・笹野恵理子「高校生の部活動にみる音楽活動の形成過程——高等学校における軽音楽部のエスノグラフィを通して——」『学校音楽教育研究』16、25-36、2012年

・音楽之友社編『新版 吹奏楽講座7——吹奏楽の編成と歴史』音楽之友社、1983年

・斉藤浩一「中・高校の部活動が大学生生活適応に及ぼす影響」『日本特別活動学会紀要』(9)、24-32、2001年

・桜高軽音部研究室『けいおん!の真実』笠倉出版社、2011年

・吹奏楽雑学委員会『知ってるようで知らない

い吹奏楽おもしろ雑学事典』ヤマハミュージックメディア、2006年

・戸ノ下達也編著『日本の吹奏楽史』青弓社、2013年

〈参考資料〉

・Senior, Jennifer “Why You Truly Never Leave High School: New Science on Its Corrosive, Traumatizing Effects” in *New York Magazine* (published on Jan 20, 2013)

・「高校軽音部、体育会系顔負け 黒髪・朝練・礼儀指導徹底」『朝日新聞』2012年10月9日付

・「普門館」音色途絶える 吹奏楽コンの聖地、改修を断念」『朝日新聞』2013年11月14日付

・「高校吹奏楽部がCDデビュー…オリコン総合25位」『読売新聞』2014年2月27日付

・全日本吹奏楽連盟会報『すいそうがく』(2012・7 No.190、2013・7 No.193) 一般社団法人全日本吹奏楽連盟

・埼玉県高等学校軽音楽連盟 (<http://music.geocities.jp/keionsaitama/>)

・高等学校軽音楽部連盟大阪 (<http://www.keionrenosaka.com/>)